

2 表現化に視点をあてた中学部の指導

(1) 中学部の学習指導に対する基本的な考え方

中学部の教育は小学部の課程を終えた児童が、三年後には殆んど全員高等部に進んでいくという実態から出発する。遊びをとおして身近かな社会を理解し、精いっぱい参加ができるよう日常生活の基本的なことから身につけた児童を、家庭生活や将来の職業生活の自立をめざして学習計画を樹てる高等部に進学できるように、教育課程を編成し指導がなされなければならないものとする。

中学部の教育方針を『集団の中で自分らしさをすなおに表現しながら、すすんで自分の生活をきり拓いていく意欲や、それに必要な理解や技能を身につけさせる』こととした。具体的には、小学部で身につけた社会参加の能力を更に高め、参加の範囲や経験内容を拡大し、徐々に地域社会のしくみや働きについての基礎的な理解を深めさせ、すすんでこれらに参加させながら将来の職業人としての、あるいは家庭の一員として必要な基礎的技能や態度を養い、高等部における職業教育のための基盤づくりを図ることである。

(2) 中学部における学習指導の内容と方法

中学部は啓発的経験の時期である。そして、それは中学部の基本的な考え方から考えてもわかるように、社会化・職業化の方向に向って有効な経験が啓発され、拡大されるよう教育内容が組織化されて編成される必要がある。

また、この内容を現在の生徒の生活の中でどう学習させていくかという点で、生活単元学習や作業学習の形態をとりながら指導していく方法を考えていきたい。この場合、中心になるべき社会化の内容や職業化の内容は、それぞれ独立して単元化されて社会化の内容は生活単元学習で、職業化の内容は作業学習で指導されるということではない。各々の内容を中心にしながらも、他の分野の関連した内容とを併せて、現在の生徒にふさわしい目標や生活のまとまりのある単元に構成されて指導されるのである。

また、中学部の初期のように職業的な意識もうすく技能的にも低い段階であり、生活と作業の内容が極めて身近かな問題として取り上げられる時期にあつては、職業的な内容、作業的な内容もかなり生活の問題として取り上げられて、生活単元の内容として構成され指導されることもできる。学年がすすみ職業的知識の基礎や職業的技能の習得がみられるにつれ、生徒が作業に対する意識を持つ段階になって、一段と拡大された社会生活に関連づけられた職業化の方向をめざした作業学習として指導されることになるのである。

(3) 中学部における表現化のねらい

中学部の初期には、小学部からの移行の意味もあり自立化や社会化の色彩の濃い生活単元学習の形態が引き継がれるが、次第に職業化の方向が重視されることになり、徐々に作業学習がその中核となってくる。したがって表現化の視点も職業化の方向へとクローズアップされなければならない。

表現化としての作業学習や知的学習は、生産、製作をとうして将来の職業人、社会人として社会生活のできる人間育成にあるのであって、中学部はその職業前準備段階として大きな意味をもっているのであり、この所に表現化の視点が当てられなければならない。

初期の生活単元学習による指導法や作業学習による指導は、生産や製作による表現活動によって望ましい理解、技能や態度を身につけていく指導過程である。そして、これを基礎としてさらに表現活動を積み重ねることにより、より高いレベルの理解、技能や態度を身につけて社会化や職業化することになる。

表現活動を拡大しながら積み重ねていく。これが啓発経験の拡大に他ならないが、この時、表現活動の内容や方法、拡大の方向が職業化の方向に統合されなければ職業化は達せられず、職業的啓発経験も無秩序となり、中学部教育のねらいは核心からそれることとなるのである。

分野としての表現化の内容の学習については二つの面が考えられる。ひとつは表現活動の手段としての学習内容であり、他のひとつは表現の基礎としてのいろいろな能力の養成である。前者は他の学習や生活のあらゆる場で手段として使われる表現活動を支えるのに対し、後者は養護・訓練などと同様に学習や表現化のための基礎としての諸能力を養い育てることがねらいとなり、特定の場を設定して指導しなければ効果が期待できない面である。

表現のための基礎となる能力の育成は、特に教科的な時間や養護・訓練の時間にゆだねられているといつてよい。この場合、教科の時間だからといって、ただ単に教科の系統やドリル学習に終ってはならないのである。表現化のための教科の時間に取り上げられる学習内容は、その時点での生徒の主たる生活目標や日常生活活動につながっておりながら、その社会化や職業化にむすびつく内容でなくては生徒の学習が生きてこないということである。

(4) 生活単元学習による表現化の実践

— 生活単元学習による作業学習化の実践例 —

生活単元学習は、子どもたちの生活から出発し、具体的な課題解決を通した学習であり、学習したことが目的とする場面に直接生かされるという過程を通るため、表現化（生かし使える、社会活動として表現する）に重要なかわりがある学習形態の一つである。

生活単元学習は、興味、必要感、目的意識によって活発な表現活動を促しながら、同年齢の子どもが知っているあたりまえの事を一つでも身につけ、問題を解決する道すじを考えながら問題に立ち向かっていく態度を育てて、将来の社会的自立へ向って、表現力を育成するという面から考えて、当然表

現化をめざす一つの指導法といえる。

1) 中学部における生活単元学習のねらい

中学部には、将来の職業生活への基礎づくりという重要な目標があり、作業学習が指導内容の中核になってくる。しかし、中学部前期では、まだまだ小学部からの移行の段階で、表現力も乏しく、興味を中心も、行事などの身近な生活にあるため、直接的な作業学習への取り組みは困難であり、生活単元学習をその中核におかざるを得ない段階である。

しかし、作業学習への移行を考えた時、当然、小学部の生活単元学習とは異なり、学習内容に労働的作業活動を多くとり入れ、その目標を位置づけて、生活単元学習の作業学習化をはかった総合的な単元構成が必要である。

中学部後期になると、高等部の職業教育、社会での就職への移行が当然考慮され、作業学習が大きなウェイトを占めるようになる。しかし、作業学習が生活単元学習のすべてを引きついしてしまうのではなく、それぞれの生徒たちが生きている生活や社会の理解、生活経験の拡大という立場で生活単元学習も必要である。但し、彼らの生活、社会、生活経験は、この段階では将来の職業生活にかかわるものと関連づけながら拡大していかなければならない事を考えると、作業学習と生活単元学習は有機的なかわりを持った総合的な単元構成を考えていく必要がある。

以下、中学部1年の生活単元学習から作業学習への一つの過程を実践的に示すことにする。

2) 生活単元学習「臨海学校」における実践例 — 中学1年 —

① 単元設定の理由

- ・ 臨海学校は、水泳訓練という目的と同時に、2泊3日の共同生活を通して、生活力をためしたり、生活の仕方を経験するという目的がある。特に宿泊施設が、自分たちの力を出し合ってお互いに協力しなければ運営できにくいしくみになっているため、彼らの実践力をためすのに適した場であり、この生活へ向ってのとりのくみの中に、問題を解決していくための、技能の習得や態度の養成をねらうことができる。
- ・ 臨海学校での生活ができるためには、いろいろ準備や練習にとりくまなければならない。その具体的な生活活動を通して、いろいろな能力が習得される。臨海学校へ向けた準備の過程にも労働的作業活動も含めて多くの学習が含まれており、意欲や目的意識に支えられながら、意欲的に学習にとりくみ、実践につながる能力の育成ができる。
- ・ 教師の意図的配慮や指導がかなりかかわってくるが、行事参加という形で「生かして使う表現活動」を評価できる場面がある。また、学習したことを自分たちの力で活用できたという経験は、彼らに自信を持たせ、次の行事や社会生活へのやる気、意欲的な取り組みとなって、表現の基礎づくりを高めるものである。

- ・ 総合的な生活経験学習である生活単元学習の中からは、それに関連した知的教科学習や作業学習との関連を考えることによって、基礎的な能力の育成や活用場面を発見し、発展させる機会にもなる。臨海学校はそのような内容を多く含んでいる。

② 指導計画（作業と合わせて35時間）

次頁の指導計画で示すように、中学部前期の生活単元学習のねらいから、作業の学習「コースロープ作り」に一つの大きな中心がおかれ、生活単元学習の作業学習化がはかられている。それと同時に、学習をすすめていくための基礎的な能力の育成の場として、教科学習が位置づけられている。

生活単元学習にとって、分野での表現化の内容は、活動していくための基礎能力作りという役割りを果している事が多くある。生活の中で、何かができるためには、それなりの基礎能力づくりが、知的教科学習の面からも当然行われていなければならない。いろいろな活動が、意欲的な支えと同時に、教科的な支えを得ながら展開されていく。

指導計画の作成に当っては、生活から発展してくる作業の内容はもちろん、教科学習との関連を充分おさえていかなければならない。ここに、中学部初期の段階での表現化をめざした意図がある。

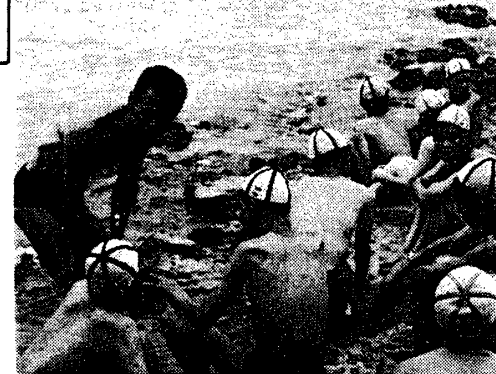
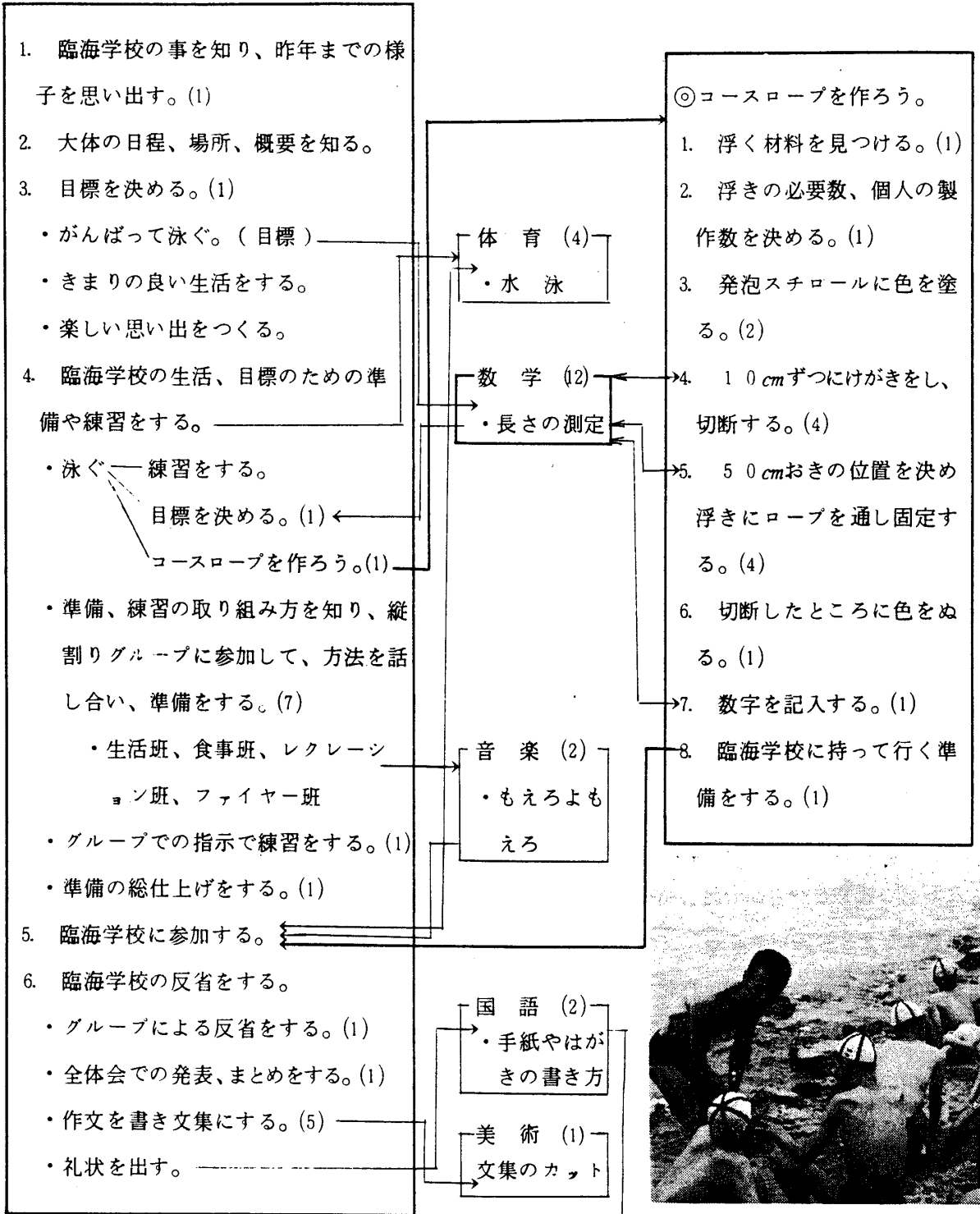
以下、次頁の指導計画にもとづいて、生活単元学習の作業学習化がどう行なわれ、それと教科とがどう関連していったかを、作業の技能、数学との関連を中心にして実践的に述べてみたい。

指導計画(1年)(20時間(作業を含めて35時間))

〔生活単元〕(20時間)

〔関連教材〕

〔作業学習〕(15時間)



→ 暑中見舞に発展

③ 「コースロープ製作」の単元設定の経過と理由

- ・ 7月の生活単元学習「臨海学校」で設定した目標の一つが、「がんばって泳ぐ」ということで、昨年の実績をふまえて各自の目標距離をきめた。ここで、泳いだ距離をどのように測れば良いか……が問題になり、プールの絵をヒントに、コースロープを作ることが生徒の中から提案された。そこで「よし 作ろう」ということになり、7月の職業科の題材「平箱作り」の学習目標とずれない配慮をしながら、急ぎ題材変更を行った。なぜなら、臨海学校を目前にした作業にとりかかる方が、生徒たちにも切実な目標意識ともなるし、意欲的に作業に取り組み働く喜びにつながり、すすんで働くという作業への表現活動に発展していけると考えたからである。

ここで、生活単元学習から作業学習への分化がとられた形となったが、我々はこの作業内容も含めて、生活単元学習としてとらえていきたい。いわゆる生活単元学習の作業学習化である。

- ・ ところが、この作業学習へ取り組むためには、いくつかの問題を解決していかなければならない。コースロープ製作という目的のためには、製作のための基礎的、基本的能力の伸張をはかることが大きなねらいとなってくる。従って、学習展開に当っては、知識・技能・態度にかかわるそれまでの系統性、他教科とのかかわりなど充分検討されなければならないし、製作にかかわる知識・技能・態度をどう育てていくかという配慮が大いにかかわってくる。そこで、今までの学習と、作業のために学習しなければならない課題（作業のための基礎づくり、つみ重ね）とのかかわりを、しっかりおさえていかなければならない。
- ・ コースロープの作業工程には、材料の選定、長さの測定、数える、けがきの能力、のこの使用、塗装など、作業活動のためにいろいろな能力が要求される。

数える、長さの測定については、4、5、6月に数学の学習で扱われてきているので、その実態をふまえて個別的配慮をする事もできるし、これを機会にあと一つ基礎能力の育成を目ざすこともできる。

のこの使用については、4月頭初、ほとんど扱い方を知らなかった段階から、資料に示すように少しずつ扱いにも慣れてきたし、発泡スチロールという材質から考えて、正確な切断の初歩的技能をねらうには適した素材であるともいえる。

けがきについては、長さの測定と関連を持たせながら、能力に応じた道具や治具の工夫によって、どの子にも新しい技能として経験させていけると考える。

以上の点から、このコースロープの製作は、活発な表現活動と表現能力の育成を見ぞしていけると考えた。

④ 「コースロープ製作」の単元の目標

- ・ コースロープ製作に意欲的にとりくみ、自分たちで役に立つものを作った充実感を通して、

働く喜びを味わう。

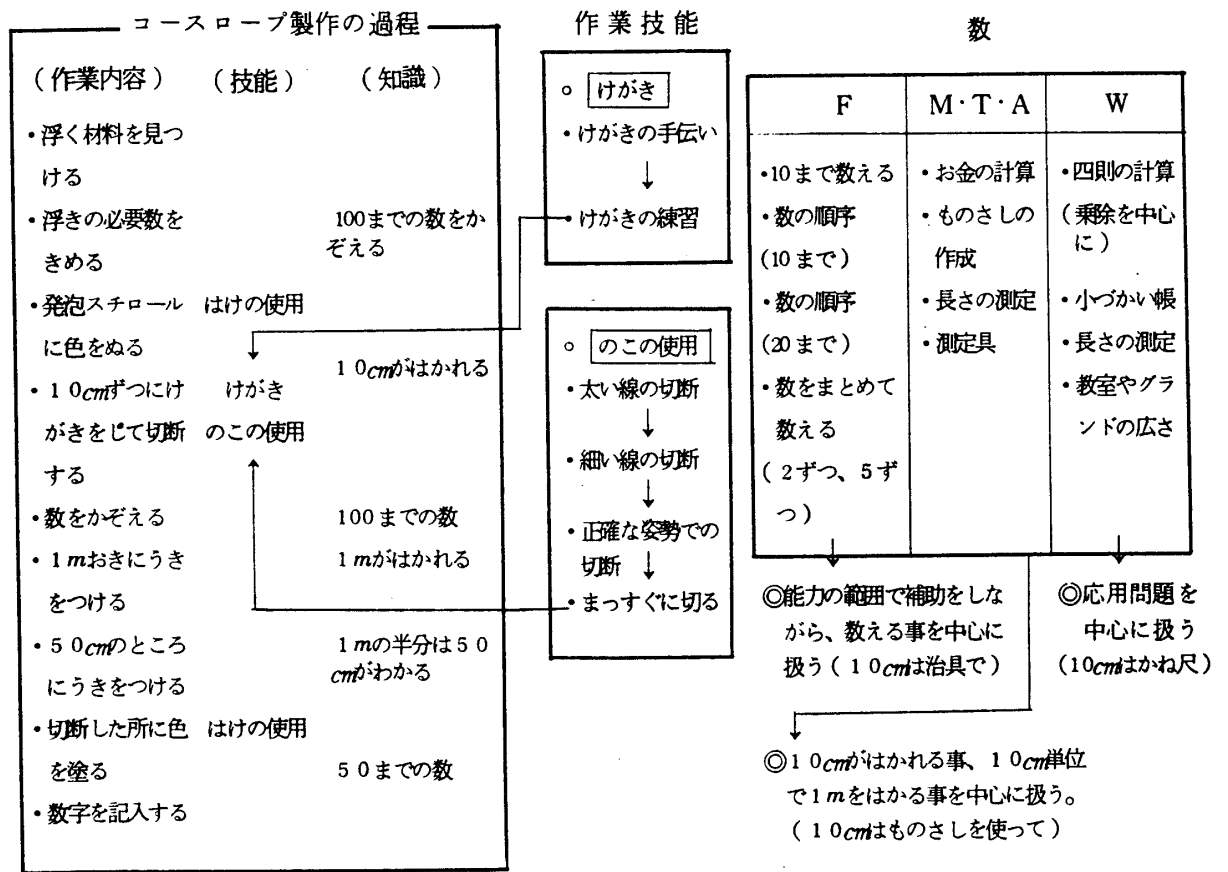
- ・ この使用に慣れたり、けがきのしかたがわかるなど、作業で使う道具の使用に慣れる。
- ・ 友だちと協力して、一つのものを作り上げる喜びを味わう。
- ・ 数を数えたり、長さを測ったり、計算することを能力に応じて、仕事の中で生かし使おうとする。

⑤ 「コースロープ製作」の指導計画と、それにかかわる基礎能力育成の学習過程

先にも述べたように、生活単元学習や作業学習に含まれる学習内容は、その活動を展開するための基礎作り、積み重ねの経過を重視しなければならない。コースロープ製作に先行した、数学での長さの学習が重視されるのもそのためである。

逆に言えば、教科で学習している範囲で、個々の能力の実態に合わせて、学習内容を定めたり治具や手だてを工夫する必要がある。そのためには、個々の生徒の経験の系統性をしっかりおさえておく必要がある。

次の表は、4月から、コースロープ製作までの経験の経過を作業技能と数からおさえたものである。



⑥ 「コースロープ製作」と関連して、数学「長さの測定」をどう指導したか。

活発な表現活動が行われるためには、その基礎となる知識・技能の育成がはからなければならない。この小単元では、特に、長さの測定に着目しているが、ものさしで長さがはかれなかった3名の生徒に、コースロープ製作をめざしながら、長さの測定をどう指導していったかについて述べてみたい。

・単元設定の意図

能力別編成でミドルクラスにいる生徒は、目盛りの位置を示してやれば、その目盛りを読む事ができる。しかし、物を測ったり、指定された長さをとったりする事ができない。コースロープ製作に当って、ぜひ10cmの把握をさせたい。しかも、それを1mまで拡げていけば、よりコースロープと関係を持ちながら、泳いだ距離とも関連づける事ができる。

コースロープ製作の意欲に促されながら、長さの測定の学習への関心がより高まり、より真剣に学習にとりくみ能力が定着する事や、学習内容が実生活の中で活用される事に表現化を意図している。

・指導計画(9時間扱い)

1	いろいろな物の長さをくらべる -----	1 時間
2	机の幅と高さをくらべる -----	1
3	同じ長さのものをさがし、測る -----	1
4	1mのさしを作る -----	2
5	自作のさしを使って、身の回りにある物の長さを測る	
	・1m以下の物の長さを測る(10cmを中心にして) -----	1
	・自分たちの身長を測る -----	1
6	巻き尺を使って教室の長さを測る -----	1
7	コースロープの長さを測る -----	1

・「ものさしを作ろう」の展開例

題材について

私たちは日常、長さを量的に把握し、さしの目盛りは、その量を示していると考え。しかし、このクラスの生徒は、目盛りの数字を読む事ができても、それが1cmの10の集まり、20の集まりとして量的に把握せず、単に目盛りの位置に書いてある数字を読んでいるにすぎない事がわかった。ここに、さしの目盛は量的な集まりを示しているものであることを充分把握させなければならない。

生徒は、6月の学習では、自分の手の大きさを使って、長さを手の幅の何倍という形で大体つかむことができた。本題材では、1cmの集まりであるさしを自作する事によって、1cmの長さ、10cmの長さ、1mの長さを具体的な操作活動を通して感覚的にとらえさせたい。その事を、コースロープ製作の中で扱う、うきの長さやうきの間隔と関連させてとらえさせたい。

・ 学習過程（指導計画の第4時）

<p>2. 社会的共通基準であるものさしの必要性を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1 cmの長さ ・ 10 cmの長さ <p style="margin-left: 20px;">} 見る、話す、測る</p> <p>3. 1 mのものさしの製作をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1 cmテープ ---- 10枚ずつの山をつくる。 ・ 1 m -----10 cm幅がいくつあるか。 	<p>2. コースロープ製作で作るうきの長さ、うきとうきとの間隔等と関連させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1 cm幅の感覚 ---- 両手親指つめの先で1 cm幅を示す。 ・ 10 cm ---- 1 cmが10のあつまり <p>3. ものさしの製作のとき、各テープの端をきちんとそろえて、のりづけさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 10 cm間隔に色の違うテープをはりつけるように指導する。 ・ 10 cm幅の感覚を知らせる。 ・ 浮きの大きさとの関連をはかる。
--	--

・ 長さの測定の学習のようすと評価

壺井	この学習の展開にあたっては、cmの量感を、学習過程2の段階でとらえることができた。これ以後さしの使用はかなりスムーズになってきた。
三木	10 cm幅には1 cm幅のテープが10枚いることがわかる。1 cm幅の感覚が、大まかながらつかめた。しかし10 cmを正確にはかる事はできなかった。
飴野	10 cm幅のものさしを作るには、1 cm幅のテープが10枚いることがわかり、反復して、1 cm幅のテープ10枚の山が作れた。作ったものを生かすことはしなかった。
宮本	1 cm幅テープを、きちんと端を合わせて、1 mのものさしを作ることができた。1 cm幅の感覚がつかめた。自分でものさしに数字をつけ、ものさしをより便利にすることを考えついた。

⑦ 「コースロープ製作」の単元展開と、表現化という立場から配慮したこと。

- ・ 臨海学校で、「自分たちの泳いだ距離がわかるように使うのだ」という目標意識と、常に結びつけながら作業をすすめる。
- ・ 単に与えられた作業工程をこなすというのではなく、生徒たちの発想を大切にしながら、問題解決の形をとりながら展開していく。
- ・ 関連教材単元とのかかわりを常に意識させ、教材学習の生活化と結びつけた指導をする。
- ・ 今まで学習した事や、持てる能力をできるだけ生かし使えるよう、個別配慮をする。
- ・ 作業へのとりくみ場面、コースロープ活用場面だけでなく、日常生活化をはかる。

⑧ 「コースロープ製作」と使用の経過

・コースロープ作りを決定する

「臨海学校で、どれぐらい泳ぎたいか」という話に端を発して、泳いだ距離を、どうやって測ったら良いかという事になり、「さし、さお、テープ」の発想を経て、「折りたたんでバスに乗せられるもの」から、また、プールの絵をヒントに、「コースロープを作ろう」がきまった。使用する道具も、のこと見通しがついた。「ようし、作ろう」という意欲が盛り上がり、職業の時間に作る事が約束された。

・浮くものを見つけよう

「浮くもの」ということで、いろいろな材料を水に浮かべてみる。浮いたものでも、「穴が開けられ、それでも浮いているもの」という事で、木と、発泡スチロールが選ばれたが、発泡スチロールの方が、よく浮いているので、材料としてこれを決定した。



・浮きの数はいくついるか

「30mのコースロープ」という事で、ロープの上50cmおきにカードを置かせた。50cmがわからない生徒が多く、10、20、30…と言わせて50cmを意識させながらカードを置かせた。カードを全部集めてみると60枚あり、「浮きは60個必要」という事になった。

・色をぬろう

「コースロープには色がついている」ということで、色をぬる事にした。特に、赤と白に分けた方がいいという意見もあったが、ペイントがぬりたくて、赤と黄色に分ける事にした。


約1mの発泡スチロール4本を黄色、2本を赤色でぬった。5月の木札作りでペイントを塗る学習をしていたので、扱い方はうまく、はけにたっぷりペイントをつけて塗っていた。しかし、同じ所をいつまでも塗ったり、ゆっくり塗るためにかわいてしまったり、まだまだ個別の指導が必要だった。「きれいに塗れた。色を塗ってとてもきれいになった」と、ここで、コースロープづくりへの意欲が急速に高まった。

・けがきをする

かわいた発泡スチロールに、いよいよけがきをする。

どの学習についても同じ事であるが、私たちは学習の展開に当って、常に個々に対する配慮を充分行わなければならない。表現化に視点を当てた学習ではこの点と、個の活動が他の人にかなる形で承認され社会的活動として認められるかという点にある。

次に、けがきの学習展開の一部をのせて、その実践例としたい。

学 習 活 動	指 導 上 の 意 図 ・ 留 意 点
<p>1. 作業目標を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 前時に作った浮きの数を実物とグラフを使って確認する。 製作した浮きの数だけシールを取っていき、本時の製作数を図の残りのシールで求める。 <p>2. けがきをする。</p> <p>A…治具を材料にきちんと合わせてけがきをする。</p> <p>T…ものさしの端を線にきちんと合わせてけがきをする。</p> <p>M…治具にえんぴつを押しつけてけがきをする。</p> <p>F…治具を材料にきちんと合わせてけがきをする。</p> <p>W…曲尺を材料に押しつけてけがきをする。</p>	<p>1. 数えることはA、Fの学習、Wにはできるだけ計算で解かせたい。M、Tは計算式の意味を具体操作を通して少しでもわからせたい。</p>  <p>2. 前時、特に気をつけたことを言葉におきかえて意識化させ、表現活動を援助したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> 治具について 長いものさしでは、目盛りの打てない3人については治具を使用した。しかし、それは他の2人と同様に目盛りのあるものさしであり、目盛りを教えさせ、10 cmの長さを意識させる配慮をした。 彼らの能力に応じた働きのできる治具の工夫はいつも考えている。
<p>4. 切断した浮きが、10 cmか検査をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 検査用具の確認 ……10 cm 検査用具の使用 交互にしらべる 	<p>4. 検査用具の使用によって、自分たちの作ったものが、規格に合っているかどうかを確認させる大切な場面である。</p> <p>検査用具の使用は、目盛りの読めない生徒も、意欲的に参加できる。</p>

以上、指導案の一部をのせて、けがき作業のようすを述べた。学習活動、指導上の意図・留意点に示しているように、この学習では、数学で学習した内容を、意図的に、個人差に応じて活用させようとして、その表現化をねらう場面を設定している。数学の学習では、能力に応じて指導内容がちがっているから、それを生かすための個人への配慮が当然なされなければならない。

また、4の学習活動では、自分の製品を規格品として他に認められる場面を設定した。表現化は自己の表現が社会的活動として認められなければならない。その意味から、作業の学習における社

会的承認のひとつの形だと考える。

また、技能的な面での個人差も大きく、治具や援助の面で配慮をしているが、同じ仕事の目標に向って、それぞれの能力に応じた内容で、皆が協力して製作をし、完成した喜びを持つことは、作業意欲を盛り上げるために大切である。

表現化は、究極すれば、個人の表現をいかに大切に育てていくかという事であり、その意味からも、個に対する配慮は大切であり、個を大切にしたい。

・浮きづくり

けがき線のおりにまっすぐ切る子、のこの刃を少ししか使わないで、チョコチョコと切る子、体の位置が悪くて斜めに切る子、線の通り切れなくて治具を使う子など、個に応じて指導していった。製品は、検査板の上に乗せ一つずつ調べられていった。



・浮きをロープにつける

30mあるロープに、50cmずつ印をつけることは、さしの端を合わせるという点でむずかしかった。そこで、ロープと巻き尺とを合わせて引っぱり、1mのところ印をつけさせた。あとで1mの間に50cmをはからせ、50cmは1mの半分であるという扱い方をした。この方が生徒には50cmと1mとの関係がよくつかめたようだった。

浮きを渡す人、ロープを穴に通す人、通した浮きを印に固定する人、と分業で行って、浮きをロープにつけていった。結ぶことがなかなかむづかしかったが、自閉的な生徒が1人大変うまく結びつけ、なんとか浮きをつけ終え、皆がうれしそうだった。

・切断面に色を塗る

「切り口が白いのはおかしい」という生徒の発想で、長いコースロープを外に運び出し、切り口に色を塗った。切断面が小さく、なかなかぬりにくそうだった。

・数字を書く

前時の『50cmが2つで1m』を生かし、浮きを2つ置きに1m、2mと書くことにする。書く場所が正しく言えた人が書くことにすると、みな、真剣に考えて、一つでもたくさん数字を書こうとした。また、数字を記入しながら、「ここまで泳げるかな」「ここまでは泳ぎたいな」など、臨海での使用場面の話も出てきた。

コースロープを箱にしまいながら、生徒達の心は臨海学校への広がっていった。

このコースロープは、7月13日、臨海学校へ向からバスの中に積み込まれ、生徒たちといっしょに、諸寄の海へ運ばれた。

・コースロープの使用

水泳検定の日、30 mのロープが岩から岩へはられ、赤と黄のあざやかな浮きが一列に並んだ。この場面を頭の中に描きながら、ずっとコースロープ作りに取り組んできたのだ。足のとどかない深みで泳ぐ不安にかられていた1年生の表情が、少しゆるんできた。3年生、高等部



の人には、コースロープの数字を読みあげながら声援を送った。船から「今、何mだ」のはげましに、12 m、13 mとコースロープをはげみに30 m泳ぎ切ったK児、1 mが目標だったのに、「コースロープが見えるか」のはげましに、「はい 見えます」と、とうとう30 m泳ぎ切ったF児、1 mも泳げなかったけど「来年は泳ぐけな。50 mのを作って持

って来よう」と、言ったM児、ロープにそって進もうとしても、どうしても進めなかったT児も「コースロープがきれいだった」と表現するなど、活動や表現はさまざまであったが、1年生の作ったコースロープは、臨海学校で大きな役割りを果し、生徒の心の中に、作ったものが役に立った喜びとして、また泳ぐことを支えてくれた励ましの道具として、深く心に残ったようだ。

⑨ 「コースロープ製作への取り組みと、製作活動に対する意欲の評価

T児… 最初は、あまりコースロープ製作に興味を示さなかったが、ものさしで、けがきができたり、のこでまっすぐ切れだした時点から、意欲が高まり最後までがんばった。泳ぐ時は、コースロープの側までも行けなくて、残念だったが、夏休みの製作に風呂で使うこしかけを作り、色までもきれいに塗り上げていた。

M児… 発想の時点では大変な原動力となった。しかし、作業になると技能や能力がともなわずだんだん意欲を失っていった。でも、治具を使用しだしてからは、また意欲が出てき、仕上がった時は、一ばん喜んだ。海に持って行き、使うことも一ばん気にしていた。

F児… 道具の使用の段階になると、がぜん力を発揮し意欲的にとりくんだ。もともと「コースロープ製作」の発想は彼から出たものであるが、知的な解決を要する面では影が薄かった。

プールでの事前練習では5 m程しか泳げなかったのに、現地では、コースロープをはげみに、30 mを泳ぎ切ったのには、私達もびっくりした。彼の家の中には、彼が作った仕事場があり、彼は、そこで木材を打ちつけて、船を作ったり、自動車を作ったりすること(彼なりに)に喜びを感じるようになっている。

A児 … 自閉的な傾向が強く、言葉を使う学習にはあまり参加しなかったが、作業技能は高く、作業になると喜々として仕事にとりこんできた。また、それに伴って技能がどんどん向上した。

家庭では、木材の切断、木箱をこわす、くぎをぬくなど、それぞれの作業に応じた道具を要求し、家の人をびっくりさせたり、工作的な事にかなり興味を示しはじめた。

W児 … 浮きの個数、長さの測定など、少しむずかしい問題では中心になって活躍した。

この使用がまだまだきちんとできないが、なんとか人と同じようにまっすぐ切ろうとよくがんばっていた。

海では、コースロープにはげまされ、ビート板なしに50mを泳ぎ切った。

⑩ 小单元「コースロープ製作」を实践して

作業学習とも言える大きさで、生活单元学習の中に位置づけた「コースロープの製作」は、中学部前期の生活单元学習の展開として特徴的なものである。

作業の展開に当っては、臨海学校で使用するという、切実な目的意識と結びつけながら、しかも、できるだけ生徒の発想を大切にしたい問題解決の過程をとっていった。

また、常に、表現のための基礎能力の伸張を目ざし、他教科との関連を密にし、できるだけ関連のある教科と総合的な扱いをし、一つの目的に向かわせる中に、表現活動をめざしていった。

しかも、学習展開に当っては、個を大切にしたい、個の持つ能力をフルに活用させるように個別の配慮をしながら、個の能力の育成につとめた。

以上、表現化をめざす配慮をしながら、この小单元を展開したわけであるが、このような配慮や展開は、中学部における教科担任のシステムでは非常に困難なことが多く、指導計画を樹てる段階で十分な打合せと、教科間の共通理解に立たなければ、ばらばらのものになってしまう。

さいわい、1年担任3名が、関連のある教科をすべて担当していたという好条件に恵まれ、日々の密なる連絡のもとに学習展開がなされた。生徒たちにとっても、自分たちの力で、自分たちの生活に必要なものを作り、それが生かされたことから、今後の作業学習へのとりくみの大きな力になる单元であったと考える。

(5) 作業学習による表現化の实践

作業学習の主たるねらいは、ものを作り育てるという操作的、創作的表現活動を通して、その技能態度や作り育てたものを社会生活に生かして使い、職業化することによって社会自立に迫ろうとするものである。したがって物を作り育てる過程で、喜んで働く意欲をもち積極的に作業にとり組む態度を育てたり、仕事をするための身体的な準備等の基礎的な段階、飼育栽培製作の段階、作り育てたものを日常生活に生かし使う段階のそれぞれに表現化の視点がある。

以下、『教室のごみ箱を作ろう』の木工作業の指導過程を通して、表現化に視点をあてた展開について実践事例を示す。

(1) 題材名・学年 教室のごみ箱を作ろう 中学部3年男子

(2) 題材設定の理由

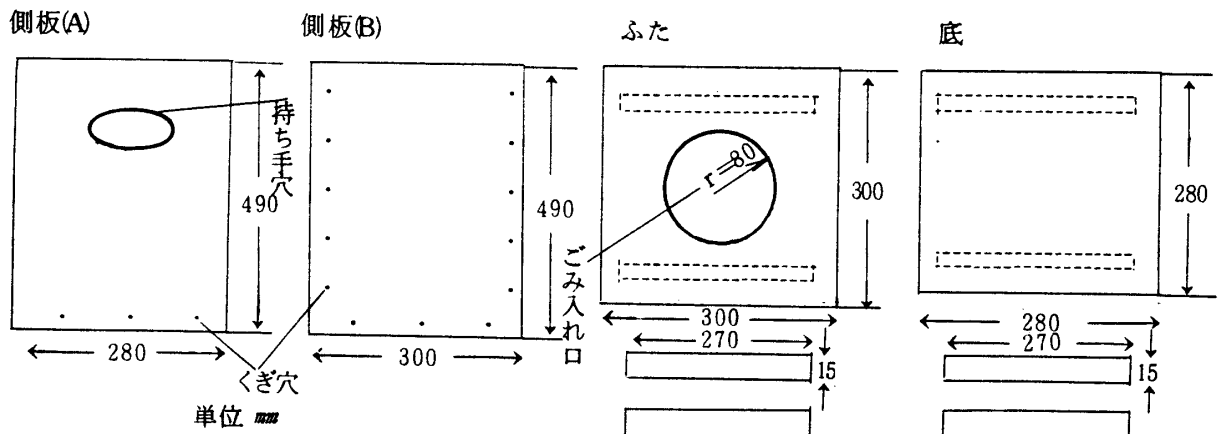
- ① この4月に新校舎に移転した。教室にごみ箱がないため段ボール箱で代用していた。作業学習で何か役に立つ物を作ろうといった時に、ごみ箱が段ボールで弱いし、ごみ捨ても不便だから、丈夫で便利のごみ箱を作ろうという生徒の意見を取り上げるようになった。
- ② 今まで簡単な工法で小さい作品を作ってきた。この度は、大きい材料を加工して大型の製品を作りたい。そこで市販の大型のごみ袋が利用できる大きさにする。
- ③ 簡単な木工機械の使用になれさせるため作業工程の中に、糸のこ盤、卓上ボール盤、電気ドリルサンダーなどを使用する作業を組み入れたい。
- ④ 多量生産のための繰返し作業により製作技能の定着化をねらうと共に、治具や型紙を活用して製品の規格化や工期の短縮を図るなど、工法の工夫に関心を向けさせたり、便利さに気づかせるようにしたい。

(3) 指導計画

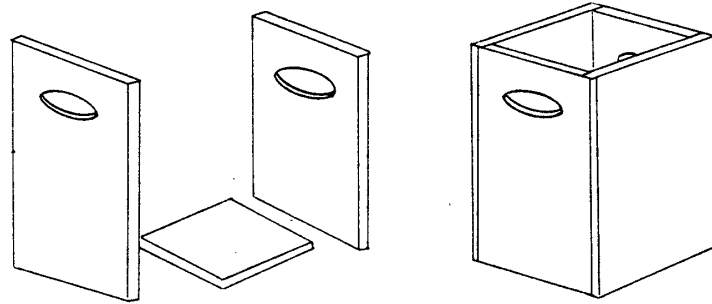
	24 時間
① 製品見本を計測して、必要材料の寸法や数量を知る。	1 時間
② およその作業計画がわかり、使用工具や機械についての理解を深める。	1 時間
③ 部品材料を作る。	3 時間
④ 側板(A)の加工作業、側板(B)の加工作業、ふたの加工作業	} 10 時間
⑤ 組立て作業	
⑥ 塗装仕上げ加工	8 時間
⑦ 学習のまとめ	1 時間

(4) ごみ箱の製作図

ごみ箱の部分の寸法や組立図は次のようである。



組立図



(5) 製品の仕様および工作法

- ① 均質な材料確保と加工の容易さのため、材料として10%厚のラワン合板を使用する。
- ② 工法を簡素化するため、教師があらかじめ280×1800、300×1800に裁断した材料を与える。
- ③ 木取りには曲尺を使用して直角をとり、寸法線を書く。
- ④ 裁断はすべて糸のこ盤を使用して行なう。
- ⑤ 側板(A)の持ち手穴、ふたのごみ入れ口の円形は、型紙を使って裁断線をけ書きする。
- ⑥ 側板(A)、側板(B)のくぎ穴は、卓上ボール盤に治具を装着して使用し、1.5%のドリルで板の端面より5mmの位置に正確にあけるようにする。
- ⑦ 組立ては、ボンド接着とスクリーナー釘打ちを併用して堅牢さを保つようにする。
- ⑧ 研磨は表面をサンダーで研磨し、端面や曲線部分はサンドペーパーによる手仕上げとする。
- ⑨ 塗装は、との粉目止めをして速乾ニスの上塗りとする。

(6) この題材における表現化の視点

木工による作業学習の表現化のポイントは、すすんで仕事をするという積極的な学習意欲を持続させるということを最も大切にしながら、作業の基礎になる技能の習得、習得した技能を使ってどう製作するか、作ったものや身につけた技能をどのように日常生活や社会生活の中で生かして使うかという点にある。

以下、この三点について、この題材での視点を明確にしたい。

基礎になる技能を習得することでは、特に新しい技能を学習する時が重要である。この題材では

- 糸のこ盤による厚板の曲線切断作業
 - 速乾ニスを使用する塗装作業
- の二つの作業が新しい経験として学習される。

糸のこ盤による切断作業は、今まではすべて5～6mm程度の薄板であって、10mmの厚板切断は初めてである。また、速乾ニスを使用する塗装は全く初めての経験であるので、基礎となる理解や技能として溶剤の使い方や注意事項、刷毛の使い方、塗る方向、塗る速さ、塗装後の処置、しまい方、それに塗り重ねに対する注意などについて、理解を深めさせたり基礎練習をさせることが大切である。

- ② 多量に生産する場合、製品の仕上りについて、大きさや体裁であまり差のないことが要求される。そのため寸法に合わせて正確に切断する。規格に合わせて正確に組立てる。できるだけ均質に塗装するなど製品の規格性が要求されることは、正確に表現する、正確に製作するという点が重要な表現化の視点である。
- ③ ごみ箱が完成して各教室に配られた時、学校内の児童・生徒や先生たちが喜んでこれを利用している状況が、製作者として、「僕の作ったごみ箱だ。」「役に立っている」「皆が使ってくれている。」という満足感をもたらす反応に期待したい。これが、また次の作業学習への意欲をもり立ててくれる。

(7) 指導の実際

① 側板(A)の加工作業(ミシンのこで持ち手穴を切り抜く作業)

T・S児 14歳11月 IQ57(鈴木ビネー)

作業速度は遅いが、何事も責任をもってやろうとし、長続きする。緊張興奮し易い。

作業の手順	教師の指導	生徒の活動
1.型紙で切断線をけ書き	1.2.3の作業は、すでに定着した技能であったので指示だけで作業を進めさせる。	3.すでに理解されている作業手順だと思っていたが、のこ刃を穴に通すことを忘れ、早く切ろうということにとらわれ、切り出し口を見つけるのにとまどっていた。
2.電気ドリルでのこ刃穴をあける。		
3.のこ刃穴にのこ刃を通して、切断できるように刃を取りつける。	4の作業に入る前の練習として、別の試料で2回練習させその結果によって正式材料の切断作業に移らせる。	4.最初の切断面がけ書き線と違い凹凸が多いことを指摘したら、原因を考えていたが、刃の張り方がゆるかった、といて張り方を修正した。 以後は比較的良好な切断作業を続ける。
4.け書き線どおり、ていねいに切り抜く。		

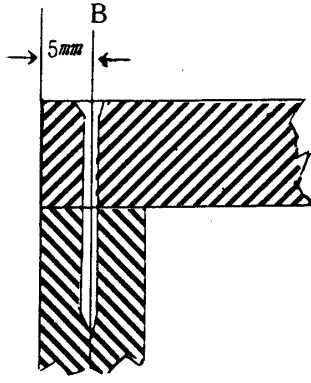
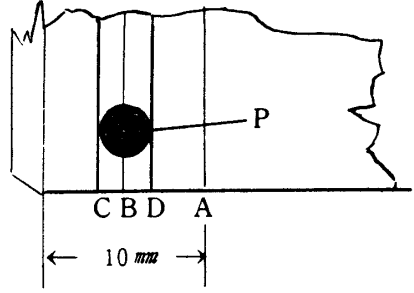
考察：本児は作業態度は非常によいが、性格的に固執性が強く、緊張したり興奮し易い。負けず嫌いであり、人よりも早く作業をしよう、人に負けまいとする心情が本時のつまづきになったと思う。

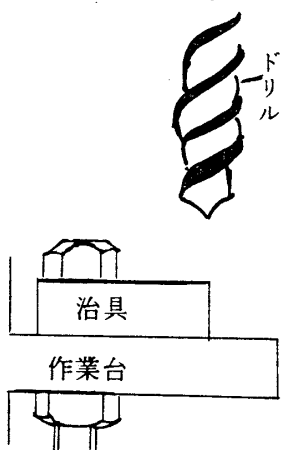

4の作業の失敗も、主原因はのこ刃の張り方でなく、過度な緊張による目と手の共応のまづさであったと思うが、本児がのこ刃の張りを修正したことにより原因は除かれたとあって、以後正しく切断作業が進行したのでそのまま学習を進めさせた。

② 側板(B)の加工作業(卓上ボール盤でくぎ穴をあける作業、とくに治具の使用に気づかせること
を意図して学習させる。)

K・Y児 14歳4月 IQ84(鈴木ビネー)

理解力はよく、いろいろと工夫をしたりアイデアを生かした作業をする。一方、早合点、
早とちり、知ったかぶりをし、がん固に自説を主張して他の意見を聞こうとしない。身
体がひ弱で、体力的にも精神的な面でも作業が長続きしにくい。

作業の手順	教師の指導	生徒の活動
<p>1. 練習板の指定位置に 1.5mmの穴をあける練習</p> <p>2. くぎ穴を側板に印つ ける。</p>	<p>1. 3.2mmの大きさの黒 点各10個を2cmの間隔 に印した練習板に正しく 穴をあけさせる。</p> <p>2. 板の厚さが10mmであ ることを強調して、くぎ 穴を印させる。</p> <p>(2) 右図のように作図し ていたの、その意図 を聞く。</p> <p>(3) Pの黒点は3mmもあ り中心が不正確になる。 下の図ようになるわ けだからB線だけ引け ばよいではないかと質 問する。</p> 	<p>2.</p> <p>(1) 板の厚さが10mmだからといいな がら作業を始める。</p>  <p>(2) 線はA→Dの順に引く。 Pは、くぎの頭の大きさで、くぎ 穴はこの真中にあければよいという。</p> <p>(3) だげどと言ってなかなか納得しな い。線を4本引くよりも1本の方が 早いではないかといっても、これで よいといって自説を主張する。</p>
<p>3. 卓上ボール盤を使用 してくぎ穴をあける。</p>	<p>3. そこで、実際にボール 盤を使用してくぎ穴をあ けさせた。</p>	<p>3. 結果は実に不正確であり、板の端面 より3~6mの間にくぎ穴があけられ てしまった。</p>

作業の手順	教師の指導	生徒の活動
<p>4. 治具の使用の工夫 ボール盤の作業台に定木をボルト止めして治具を取付ける。</p>  <p>5. 治具を使ってくぎ穴をあける。</p>	<p>4(1) この木を使って、早く正確に5mmの位置にくぎ穴をあける方歩はないか、工夫してみなさい。</p> <p>(2) 左図のようにセットしておして、再び工夫を求めろ。</p> 	<p>4(1) 治具をドリルの位置から離してセットした時には、治具の意味がわからず、無関係な部品としか扱わなかった。</p> <p>(2) 左図のようにセットすると治具を動かさないと穴あけができない。</p> <p>ボルトをゆるめて動かす時、「何cmずらしたら5mmの所にドリルがいくか」のヒントに思考錯誤しながらも正しくセットすることができた。</p> <p>5. け書きしなくとも、短時間しかも楽に作業でき、自分の工夫に満足していた。</p>

考察：比較的知能が高く理解力も工夫力もありながら、多少理屈に合わなくても容易に自説を訂正しようとしないう本児の指導に対しては、非合理性や不経済性を目に見える形で理解させなければ効果は少ない。

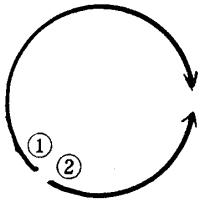
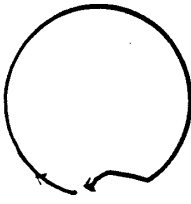
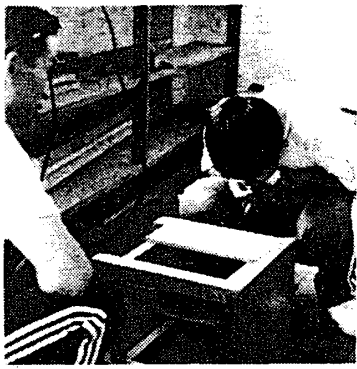
2. くぎ穴をけ書きする作業の非合理性は、実際に彼流で作業させ位置の不正確さや作業時間の遅速で納得させる外はないと思った。彼流で側板(B)のくぎ穴13個をあけるのに、け書きから始めて18分かかった作業が、治具を使用して2分弱で正確に作業が終了したのである。

このことは、K・Y児に仕事をする時に少し工夫をすると、随分便利になるということを意識させたようだ。

③ ふたの加工作業（ふたに直径16cmの円形の穴を切りぬく作業）

H・T児 15歳2月 IQ49（鈴木ビネー）

ダウン症、人なつこく愛きょうがある。肥満体で平衡感覚が鈍い。視力は両眼0.3以下であり機器の使用に対して用心深く、ひとりでは使用しようとしなない。

作業の手順	教師の指導	生徒の活動
<p>1. 型紙を使って円形をけ書きする。</p>	<p>1. 練習として実物大の段ボール紙に型紙を当てて円形をけ書きする練習をさせる。</p> <p>(2) 円形のかき方の順序を変える。</p> 	<p>1. 視力が不足のためか、指先きの感覚が鈍いためか、又は型紙を押さえる筋力不足のためか、型紙を正しく合わせる事が困難。</p> <p>・円形をけ書きするのに下図のようになる。</p>  <p>(2) 一筆で書こうとする最後の$\frac{1}{5}$が歪んでくるので、二筆で書かせると正しくけ書きできた。</p>
<p>2. 電気ドリルを使って糸のこの刃を通す穴をあける。</p>	<p>2.(1) 電気ドリルを片手で持ち、始動させたり止めたりする練習をする。</p> <p>(2) 印の位置に垂直にドリル穴があけられるよう練習板で練習する。</p> <p>(3) 一列（約10回）練習した所で、ひとりで操作する方法に切り替える。</p> <p>(4) 三列目からは、あいた穴に釘をさして、垂直にあいているか試させながら作業させる。</p>	<p>(2) ひとりでは操作をこわがるので、教師が手を添えて練習に入る。</p> 
<p>3. 糸のこ盤を使ってけ書き線にそって円形を切り抜く。</p>	<p>3. 練習として教師が補助しながらミシンのこを操作して切らせる。</p>	<p>3. ひとりでやる自信がないためか、視力が弱くて刃先がよく見えないためか、あまりすすんでやろうとしない感じが教師の手に伝わってくる。</p>

作業の手順	教師の指導	生徒の活動
<p>4. 治具を使って円形を切断する。</p> <p>自作の円形切断用治具の図</p> <p>のこ刃 支点くぎ</p> <p>のこ刃穴 支点くぎ</p> <p>のこ刃穴 支点くぎ</p> <p>支点くぎ穴にAのくぎをはめ、Bののこ刃に刃が位置するようAをセットして、ゆっくりBを回しながら切断してゆく。</p>	<p>4. 教師の自作した円形切断用の治具を使って、ひとりで切断作業をさせる。</p>	<p>4(1) 途中ののこ刃を1本折った。これは大変なショックで、以後の作業速度が極端に落ちる。</p> <p>(2) 給食時間に大きくくい込む程の時間をかけて、ついに一人で切断に成功する。</p> <p>(3) 不得意な左脚で立ち右脚でスイッチを操作したため、過度の緊張が作業が終っても左脚はけいれんして止まず。</p> <p>(4) 成功の喜びは大きく、切り抜いた円形の木片を持ち帰って母に見せ、作業のようすを話し、ひとりでやったことを自慢したという。</p>

考察：本児は肥満体で動作も緩慢であり、あまり作業を好む方ではない。ただ性格的にはまじめであり賞讃や激励することにより努力しようとする。

作業に当っては視力が弱いことで平衡感覚が鈍く、指先きの感覚も鈍いなどから、垂直とか水平という感じがつかめない。そのため、2電気ドリルを使って穴をあける作業で、垂直かどうかを理解させるために、あけた穴に釘をさしこんで眼で確かめる方法をとった。本児は垂直に釘が立った時には、にこっと笑ってガッツポーズをとって見せ、次の作業に進んだ。これは、傍から見ると実にほほ笑ましい光景に見えるが、やはり表現化をめざすという点では、くどいようでも初期の段階では、「釘がまっすぐ」「穴もまっすぐ」「よし合格」「釘が右に少しまがった」「穴は少し右にまがっている」「ドリルをもう少し左になおして」と、眼で見たことをことばで表現して確かめ、動作で修正し表現していく学習にしなければならないのではなかったかと思った。

(8) 『教室のごみ箱を作ろう』を実践して

この『教室のごみ箱を作ろう』は、4名の3年生が今までに経験したことのない大作業单元であった。何しろ300×300×500mmのごみ箱を8個も作ろうというのだから、生徒たちは大いに張り切った。

もっとも、張り切る原因は他にあった。それは、①自分たちでごみ箱を作ろうと発案した。②今ま

でに使ったことのない工作機械を使って作業できる。ことであつたように思う。

製作に当っては、予備練習作業 → 本作業と基礎になる技能の練習を重視し、①正確にする。②安全に作業する。③きれいにする。そして、④できるだけ早くする。ように心がけさせる。また、最初の4個は、各人に自分の能力を生かして1個作らせ、啓発的経験をさせることとしたが、残る4個については、各人の最も得意とする技能工程を専門に分担させて製作した。このことは自分の仕事に責任も持たせることになると共に、生徒に木工作業はできる、おもしろいという実感を得させることになった。

各教室に配られて毎日の学校生活の役に立っている「ごみ箱」は、生徒たちに、やればできるといふ自信を植えつけてくれたようだ。生徒たちは今日も力いっぱい作業学習に励んでいる。

(6) 中学部における表現化をめざした学習指導についての考察

私たちは精神薄弱児の社会自立のためには、その基礎として表現能力の育成が重要であることを認識して、従来よりも特に表現化に視点をあてた教育課程を編成するための基礎の作業を行ないながら表現化をめざした学習指導についていくらかの実践を積んできた。

今回は中学部における教育課程の編成のための最も基本的な考え方について実践報告したが、生活単元学習、作業学習、教科的指導の三つの指導形態と関連のさせ方についてのおよその理解をした。今後、年間の月別指導展開を積み重ねて検討することにより一層はっきりした考え方が提言できると思う。

また、実践研究中に、中学部初期と後期においては表現化の視点が異なることについては、理論的にも気づいて留意していたわけであるが、指導形態のちがいによっても表現化へのアプローチのちがいが大きい事に気づいた。このことは、取り上げた題材によってもちがうことが当然考えられるわけであるから、表現化をめざした学習指導の評価とともに今後の研究課題であろう。

さらに、中学部における表現化の指導や研究に止まらず、小学部から高等部へと指導をつなげたその中での表現化をめざす研究になることが、児童・生徒をより社会自立に導く近道だと考える。